



学 校 通 信

平成28年度 第 9 号
平成29年 1月10日
練馬区立開進第三小学校
校 長 土 屋 信 行

何 を 誰 に …

校長 土屋 信行

新年おめでとうございます。旧年中は本校の教育活動に温かいご支援とご協力を賜り、誠に有り難うございました。本年が、子供たち、そして皆様にとりまして素晴らしい年となりますよう心からお祈り申し上げます。

さて今月は、規則やきまりではないけれど、人が他者と接する際に気にかけて方がよいと、私が思っていることについて書かせていただきます。

それは、「誰もが知っている、分かっていることでも、口に出して言うてはいけないこと、言わない方がいいことがある」ということです。これは、そのことに触れると、「誰かが傷つく」「言った本人が信用をなくす」等の理由が考えられます。また、これとは逆に、「他の誰もが言わなくても、自分が言わなければならない時がある」ということもあります。これは、その時に自分が言わないと「自他の人権が侵害される」「悪い方向に物事が進んでしまう」等の理由が考えられます。

この世の中、いくら「言論の自由」があると言っても、「思ったことや考えたことをすべて口に出してよい」ということにはないのです。「何を言うか」「誰に言うか」「いつ言うか」「どの程度言うか」等をよく考え、その上で発言すること、つまりバランス感覚を身に付けることが大切です。ひいては、それが好ましい人間関係の構築につながるのだと思います。では、人はそれをいつ、どこで学ぶのでしょうか。

子供が時と場を心得たバランスのよい発言をするということは、大変難しいものです。バランス感覚は、子供が幼い頃から家庭や学校等でいくつもの失敗を重ねながら身に付けていくものなのでしょう。従って、家庭教育や学校教育が重要であることは言うまでもありません。そして、このような教育は、言葉で「教える」ことも必要だと思いますが、大人が後ろ姿で子供を「育てる」ことの方がより大切になってくるでしょう。

残念なことに、今の世の中には「不適切な発言」があふれています。子供のよいモデルと言えるような大人が少なくなっています。だからこそ、私たち学校・家庭・地域の大人は、このことをしっかりと自覚して子供にかかわらなければなりません。「完璧な言動を求める」ということではありませんが、大人自らがバランス感覚を磨き、時と場に応じた適切な言動を心掛ける必要はあると思います。その後ろ姿を見て、子供は学ぶのです。

古くから言われるように、「子供は大人の言うようにはしないが、するようにはする」ことが多いのではないのでしょうか。

